

岐阜県現代陶芸美術館
Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

2006.11 Vol.8

セラ・パ
CERA・PA

〒507-0801 岐阜県多治見市東町4-2-5
tel.0572-28-3100 fax.0572-28-3101
<http://www.cpm-gifu.jp/museum>



高校生以下無料化と博物館法

◆次回開催
生誕120年—富本憲吉展

◆企画展
景德鎮千年展—皇帝の器から毛沢東の食器まで

◆教育普及活動報告
思春期のカタチ2006〈ワークショップ作品展〉

高校生以下無料化と博物館法

岐阜県は昨年(平成 17 年)4 月から、県博物館、県美術館、県現代陶芸美術館での、幼児、小中高の児童生徒の観覧料を無料とした。これまでも常設展は高校生以下無料としていたが、特別展企画展はその都度定められた観覧料を徴収していた。就学児童生徒に美術館を解放し観覧の機会を供するという点において、常設展と特別企画展を区別する理由はなく、その意味ではやっとこの点での制度上の矛盾が解消したことになる。この施策は、現在の古田知事が選挙公約に掲げていた政策のひとつで、知事就任後の骨格予算案に計上された諸政策のうちにこの施策が早速盛り込まれ実施の運びとなったわけである。

この無料化の措置が実施されて一年を経過した時点で中日新聞の岐阜県版(平成 18 年 4 月 13 日付)は、「高校生以下無料効果あり」「昨年度総入館者 4 割増」と報じている。県教育委員会の集計によれば、前記三館の入館者数の総計は前年度から 39%増加している。(有料入館数は 46%増)。当館についてみれば、前年度比 230%増という数字になるが、これは平成 17 年が三年に一度の国際陶磁器展美濃の開催年にあたり、同展との共通チケットを発行して同時開催したエミール・ガレ展が当館としてはレコードとなる約 4 万人という入館者を記録したことなどによる。

この平成 17 年度の入館者のうち高校生以下の入館者の比率は、県博物館が 46%、県美術館が 16%、当館は 4%となっている。何分当館は陶芸というジャンルに特化した専門館であることから、比較的年配層の来館者が多く、最近の調査でも、50 歳代が最も多く次いで 60 歳代となり、この辺りの年代層が格段に多い。また、言い訳じみて恐縮だが、市街地からかけ離れ、敷地内に乗り入れる交通機関は一時間に一本のコミュニティバスのみであることから、ことに就学児童生徒にはいかにも足の便が悪い。それでも平成 16 年度は高校生以下の比率がほぼ 1%であったことを考えれば、17 年度の正確には 4.3%という数字は、確かに実数は微増ではあるが、無料化の施策との関わりはなしとしないのではないだろうか。ただまだ途中経過ではあるが 18 年度の現時点での集計では、高校生以下の比率は 4.7%であり、ガレ展のようなレコードにかかわらずとも、比率が維持されたことは注目してよいのではないだろうかと思われる。これは 17 年度の集客も契機になったかとも考えられるが、開館 4 年目に入り当館の認知度がやっと低空飛行を脱してきた兆しでもあろう。

さて美術館・博物館の特に公立館での観覧料無料化について、理想を言うならば、それは年齢などにかかわらず完全無料化ということになる。何を馬鹿なことをという向きもあるかと思われるが、実はこれは博物館法の定めるところなのである。博物館法ではその第 23 条で「公立博物館は、入館料その他博物館資料の利用に対する対価を徴収してはならない。但し、博物館の維持運営のためにやむを得ない事情のある場合は、必要な対価を徴収することができる。」と記している。公立の美術館・博物館が徴収する観覧料は、実はこの条項の「但し」以降にある「やむを得ない事情」に依拠していることになる。同様な入館料の条項は図書館法第 17 条にあり、公立図書館では図書の貸し出しが完全に無料であることはご存知の通りである。

博物館法にも図書館法にも、公立文化施設の規範とそのあり方が謳われているのである。もとより全国約八百ある登録美術館・博物館(2002 年度調べ)の内入場料収入でまかなえるところは、十指に満たないとされる。文化を育むということは実利を生むことと別のことなのであり、だからこそ公が文化を支える意味があるのである。当該法は、公共文化施設

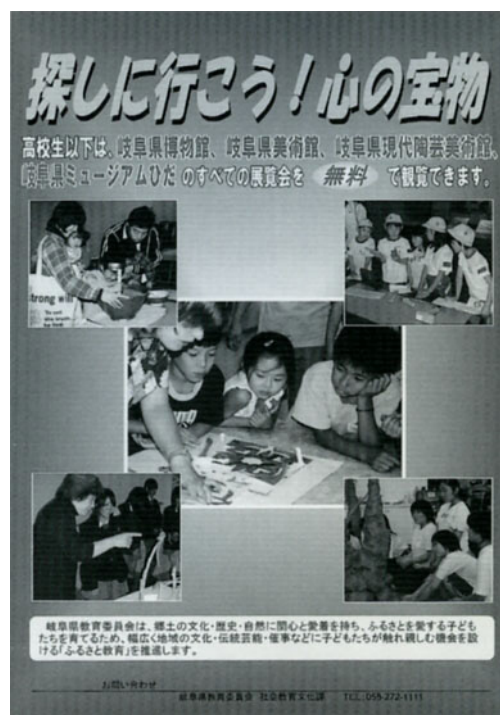
を収支のバランスシートましてや実利追求などという議論とは異なる次元で立法されているのである。これは理想にすぎないのであろうか。ここでは、にわか完全無料化実現などと主張しているわけではなく、博物館法の精神に立ち返って考えてみたいと言っているのである。

近年、美術館・博物館においても、指定管理者制度の導入が議論されるようになってきた。岐阜県では美術館・博物館において同制度は適用されていないが、この制度は「官から民へ」の旗印の下に、公共施設への民間参入の道を開くというもので、民活導入の機会を広く参入者に確保するために、業務委託には年限がもうけられ、何年かごとに更新・再公募されることになる。最近の調査では、その年限は 3 年あるいは 5 年という例が最も多いようであるが、これは 3 年か 5 年ほどで美術館施設の運営主体がコロコロと変わる可能性が高いということである。

勿論同制度の導入が必要で効果的な公共施設も少なくはないだろう。この問題は深く、その詳述は稿を改める他ないが、少なくとも美術館・博物館などに関するかぎり、二つの問題点を指摘することはできるであろう。ひとつは文化というものには継承・継続・蓄積が生命であるということである。3 年や 5 年で分断するというのは、文化行政に対する責務の放棄に他ならない。もうひとつは、こうした動向は明らかに博物館法と矛盾・背反しているということである。博物館法の精神が尊重されるならば、実利を前提とする民間参入が成立しようにないからである。

博物館法に立ち返り、公が文化を担うとは、そのような覚悟を引き受けることであるか、あるいは文化国家を標榜するとはいかなることであるのか、という地点に着地した議論こそが求められているのではないか。無料化の措置はこうしたことを考える契機でもあったのである。

【学芸部長 渡部 誠一】



次回開催

生誕120年

富本憲吉

TOMIMOTO KENKICHI-A RETROSPECTIVE

2007 年 4 月 7 日(土)～5 月 27 日(日)

およそ 120 年前の 1886(明治 19) 年、奈良県生駒郡安堵村^{いこま あんど}に富本憲吉は生を受けました。本展は、富本の生誕 120 年を記念し、陶芸を現代へと導いた先駆者として不動の評価を得ている富本憲吉が、何を求め、どのように格闘してきたのか、スケッチや書物、絵葉書などを交えた様々な作品から検証する展覧会です。

富本憲吉は、漢学を学び南画をたしなむ教養人であった父、裁縫や染織を教えていた祖母の元で、幼い頃より芸術に接して育ちました。そして 1904(明治 37) 年、東京美術学校図案科に入学して頭角を現し、卒業制作を 1 年早く完成して渡英、ロンドンやパリの美術館で各国の美術作品に接します。さらにその帰路、イスラム建築を調査に来ていた工学博士の通訳兼撮影助手として、フランスからエジプト、インドへと旅をしました。このとき描いた 100 枚を超えるスケッチからは、富本の感動と情熱が伝わってきます。

富本の大きな転機は、帰国後のバーナード・リーチとの出会いでした。楽焼に没頭するリーチを手伝ううちに、富本もまた自らの窯を築き、やきものにのめり込んでいきました。1910 年代というこの時期、美術界ではセザンヌやロダンといった西洋美術が受け入れられ、黒田清輝や荻原守衛、高村光太郎といった画家や彫刻家が活躍しています。その中で富本は、陶芸という独特な世界に「作家」としての独創性を発揮すべく奮闘するのです。

「模様から模様を作るべからず」

よく引用されるこの言葉は、富本が発した作家としての宣言であり、自信の厳格な生き方の表明といえます。ここに示された決意の重みを感じるために、それ以前の陶磁器がどのように作られていたか、振り返ってみましょう(1)。

開国して間もない明治政府は、万国博覧会へ工芸品を出品することで輸出を奨励しました。そして出品する工芸品のデザインについて、模範となる図案を示すことによって指導する政策をとりました。このときの図案の写しが『温知図録』として今も東京国立博物館に残されています。それらの図案の典拠を探ると、中国や日本に古来伝わる絵画をそのまま写したものの、あるいはアレンジしたものだったことがわかってきました。

この政策は、1885(明治 18) 年、内閣制度が制定された年に廃止され、その後、次第に図案、あるいはデザインに対する認識が変わり始め、「自分の工夫」が求められるようになります。しかし結果としてまず作られるようになったのは、西洋の装飾芸術、なかんずくアールヌーヴォーを基盤とした意匠だったのです。

富本が作陶を始めたのはこのような時代でした。そして、身の回りの景色や草花の写生から新たな文様を作り出し、各地の窯場を訪れては様々な技法を実地に研究して、誰の模倣でもない文様、うつわの形態と絡み合う豊かな装飾を創出したのでした。上記の言葉は、陶芸史に一線を画する方法を見出した富本の喜びの声だったのかもしれませんが。

(註釈 1) 横溝廣子「明治政府による工芸図案の指導について—『温知図案』にみる製品画図掛の活動とその周辺」『東京国立博物館紀要』34 1999 年 3 月 東京国立博物館

【学芸員 村山 関】

- 会 期 2007 年 4 月 7 日(土)～5 月 27 日(日)
- 会 場 岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリー I
- 開館時間 10:00～18:00(入館は 17:30 まで)
- 主 催 岐阜県現代陶芸美術館 朝日新聞社 岐阜新聞・岐阜放送
- 協 賛 日本写真印刷
- 協 力 富本憲吉記念館 全日本空輸株式会社
- 観 覧 料 一般800円(700 円)、大学生600円(500 円)、高校生以下無料
※() 内は 20 名以上の団体料金

関連企画

■講演会

- ・講 師 柳原睦夫(陶芸家、大阪芸術大学名誉教授)
- ・日 時 2007 年 4 月 7 日(土)14:00～15:30(予定)
- ・会 場 岐阜県現代陶芸美術館 プロジェクトルーム
- ・参加費 無料(展示会入場については観覧料が必要です)

■ギャラリートーク

会期中、毎週日曜日の 13:30 より、当館学芸員によるギャラリートークを行います。



《鉄絵「竹林月夜」模様角皿》1937年
岐阜県現代陶芸美術館

開催中

景德鎮千年展

皇帝の器から毛沢東の食器まで

2006 年 10 月 21 日 (土) ~

2007 年 1 月 8 日 (月・祝)

中国江西省の東北部、鄱陽湖に注ぐ昌江のほとりに位置する景德鎮は、世界的な磁器の生産地として知られています。良質の原料と豊富な燃料、そして水運に恵まれたこの地では、唐末五代（10 世紀）には青磁や白磁の生産が始まっており、北宋時代の景德元年（1004）年に、年号を冠した景德鎮の名が与えられました。明・清時代には、宮廷のためだけに陶磁器を焼造する官窯がここに置かれ、その華麗な白磁、青花（染付）、五彩などの官窯磁器は今日でも高い評価を得ています。

この景德鎮で 1975 年に、中国革命の最高指導者、毛沢東（1893 ~ 1976）主席のための専用の器が焼かれました。これは中央政府より与えられた政治任務でした。

任務を受けることとなった、景德鎮の中国軽工業陶瓷研究所には、40 人ほどのトップレベルの技術者と最良の材料が集められました。研究所には厳格に秘密を守ることが求められ、作業は秘密裏にすすめられました。近年まで、この毛沢東の器の存在が一般に知られてこなかったのには、このような背景があったようです。研究所内の会議において、その製作方針は「玉のように白く、鏡のように明るく、音は磬（※）のように」と決められ、その年の第 1 級の任務という意味をこめて、計画は「7051 工程」と呼ばれました。この任務が中央政府から研究所に伝えられたとき、はっきりと誰のために作る器なのかを教えられることはなかったといえます。しかし、皆、時代の雰囲気なかで、毛沢東のためのものであろうと想定し、この任務に取り組んでいたということです。荘重で大きく、実用的な明時代の正徳官窯の器形が原本とされ、改良が加えられます。忙しく、食事の時間も不規則になりがちであった毛沢東のため、器の形には埃を防ぎ、冷めにくくするように、蓋を伴うデザインが考案されました。分業制度という生産システムのなかで、各工程に携わる者たちは精神的な圧力

と戦い、そして研究と努力が日夜重ねられた結果、およそ半年という短い期間で、毛沢東の器は誕生します。器には、毛沢東が自らの詩文に詠んだ梅や桃の花が図案として描かれ、約 1400℃という、景德鎮の磁器としてこれまでにない高温で焼き上げられた、美しい磁器が完成するのです。約 1 万 4000 点が焼成されたなかで、実際に損傷なく完成したのは、わずか 3 割の 4200 点ほどでした。その完成品のうち約 1000 点余りが選ばれて、毛沢東の住む北京の中南海に送られました。このとき中央政府から、北京に送った作品以外は破棄するように指示がありました。しかし、制作にかかわった人々は、破損して再注文が来ても、同じレベルのものは二度と作れないと考え、密かに倉庫に保管し、毛沢東の没後しばらくして関係者に配られ、民間に流れはじめました。それらの「7501 工程」の器は、散逸を憂いた個人収集家の手によって再び集められ、近年では、「最後の官窯」「現代の官窯」と評されるほどに中国国内でも注目され、その存在が次第に知られるようになります。

本展では、この千年にわたる景德鎮磁器の変遷を、宋時代の青白磁や明・清時代の歴代の官窯製品、そして日本での初公開となる「7501 工程」の食器や文房具など、合計約 130 件でたどります。

おそらく今日まで、清時代以降のやきものが、芸術的な評価を得て紹介される機会は、きわめて少なかったのではないかと思います。そうした状況のなか、本展で紹介する毛沢東の器は、当時の最高の人材と技術、材料を集結し、芸術的にも評価される器として、中国陶磁史のなかに新たな景德鎮の歴史を刻んだといえるのではないのでしょうか。今後どのような評価を得ていくことになるのか、注目していくことにしたいと思います。

※磬（けい）…中国古代の楽器

【学芸員 佐野 素子】



《青花牡丹唐草文梅瓶》 元時代
鴻禧美術館



《五彩龍鳳文蒜頭瓶》 明時代 萬曆窯
鴻禧美術館



《青白磁獅子鈕水注・承盤》 宋時代
鴻禧美術館



《青花束蓮文大盤》 明時代 永樂窯
鴻禧美術館



《粉彩唐花文水注》 清時代 嘉慶窯
鴻禧美術館



《粉彩唐子文双耳瓶》 清時代 乾隆窯
鴻禧美術館



《釉下紅梅文喫煙具一式》 1975年
個人蔵

- 会 期 2006 年 10 月 21 日 (土) ～ 2007 年 1 月 8 日 (月・祝)
- 会 場 岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリー I
- 開館時間 10:00 ～ 18:00 (入館は 17:30 まで)
- 主 催 岐阜県現代陶芸美術館 朝日新聞社 岐阜新聞・岐阜放送
- 当別協力 MEKホールディングス
- 協 力 全日空
- 企画協力 東京国立博物館
- コーディネート S 2
- 観 覧 料 一般800円(700円)、大学生600円(500円)、高校生以下無料
※() 内は 20 名以上の団体料金
※11 月 3 日 (金・祝) は無料開放日

関連企画

■シンポジウム

「初公開・毛沢東の器—景德鎮千年の果実—」

・日 時 2006 年 11 月 11 日 (土) 13:00 ～ 17:00

・会 場 セラミックパーク MINO 1F 国際会議場

景德鎮から 7501 工程の製作関係者を招き、陶磁器生産の伝統や技術について討論および交流を行います。

■ギャラリートーク

会期中毎週日曜日の午後 1 時 30 分より、当館学芸員による展示案内があります。



《釉下紅梅文茶壺・蓋杯》 1975年
個人蔵



《釉下紅梅文文房具一式》 1975年
個人蔵

教育普及活動報告

思春期のカタチ2006ーワークショップ作品展ー

Figures at the youthful age 2006 –Works from the workshop–

2006 年 10 月 31 日 (火) ～ 11 月 26 日 (日)

今年度、中学生・高校生を対象にしたワークショップを 2 回開催しました。これは、収蔵作家を講師に招いて、作家とともに鑑賞し、作品を制作するという、こどもたちと作家をつなぐ催しです。

1 回目の「齋藤敏寿教室」では、「カタチの可能性・視点を変えて」をテーマに、造形体験をしました。(2006 年 7 月 22 ～ 23 日)

高さ 2m85cm、長さ 4m20cm もある作品を参加者全員で組み立て、齋藤敏寿作品の力強さを実感しました。制作では、大きな土の塊から切り出した部品を、視点を変えていろいろな方向から見ながら、組み合わせたり着色したりして、自分のカタチをつくり出しました。

2 回目の「松田百合子教室」では、「カタチの再発見」をテーマに、自然物を生かした作陶体験をしました。(2006 年 8 月 5 ～ 6 日)

赤や緑、金色の模様が描かれたピーマンや瓢箪といった、松田百合子作品を鑑賞することにより、身近な野菜や果物から、どんな作品が作り出せるのか楽しみになりました。まず石膏で野菜の型をつくりました。型から土色の野菜を取りだしたとき、カタチのおもしろさを再発見しました。さらに着色によって新しいカタチが生み出されました。

それぞれの教室で生れた作品を、「思春期のカタチ 2006」展として、作家の作品とともに紹介しました。作家とともに作陶することや作品を鑑賞することを通して、現代陶芸や美術への関心が深まっていくことを願っています。

【教育普及担当 加納 礼爾】



齋藤敏寿教室

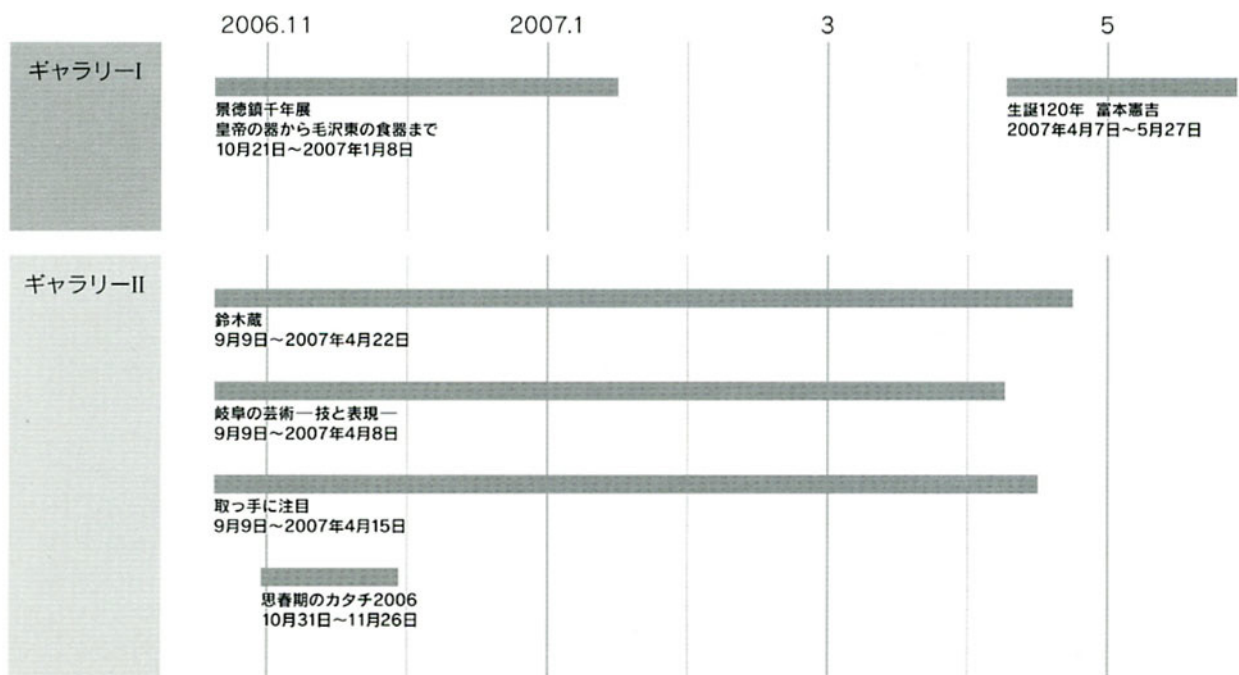


齋藤敏寿教室



思春期のカタチ2006ーワークショップ作品展ー

展覧会スケジュール



岐阜県現代陶芸美術館

小企画展

展示室 A

鈴木藏
SUZUKI Osamu

郷土の作家を紹介するシリーズの第1弾として、岐阜県の生んだ人間国宝、鈴木藏の世界を紹介します。



鈴木藏《志野茶碗》 展示室A
岐阜県現代陶芸美術館



加藤幸兵衛《曙光》 展示室B
岐阜県現代陶芸美術館

展示室 B

岐阜の芸術—技と表現—
Art from Gifu—Technique and Expression—

岐阜県美術館所蔵の絵画と当館所蔵の陶芸作品によって、岐阜県の豊かな芸術を再確認する展覧会です。

展示室 D

取っ手に注目
A Focus on Handles

日常的に使っているのに、普段はあまり目に留めることのない取っ手、その意味と形の面白さを再発見します。



上田順平《上田家十七世の肖像》 展示室D

収蔵品 紹介

ミハエル・クレフ

「Without Title」

1997年/h180cmXw41.5cmXd22.0cm

デュッセルドルフから北東へ 40km ほど行くと、人口約 40 万人のボーフムという工業都市に辿り着く。1961 年に、陶芸家ミハエル・クレフが生まれた街である。

クレフの陶芸との出会いは偶然であった。高校在学中、交換留学生としてアメリカ・シカゴへ渡り、留学先の学校の陶芸研修所で、初めて陶芸を知るのである。この出会いがクレフを開眼させ、帰国後、カーゲル工房にて陶芸家の従弟として本格的に陶芸を学び、その後アンゼルム・キーファーなどを輩出したデュッセルドルフの芸術アカデミーにて彫刻を学んだ。陶芸家として進むことを決めたクレフは、1990 年にリヒャルト・バンピ賞を受賞、その後もさらにいくつかの受賞を重ねたのち、97 年、ファエンツァ国際陶芸コンクールで大賞を受賞し、一躍国際的な作家の仲間入りを果たすのである。

彫刻と陶芸を学んだうえで、クレフが土を選択した理由は以下の 3 点である。手の触感が好ましいこと、食器やオブジェなど様々な形態を制作できること、釉薬や焼成温度などによって素地に変化が生じ、新たな表現が見いだせること。土の可塑性や焼成による変化といった陶芸独自の技術と表現を体得し、その魅力に取り付かれたのである。さらに彫刻を学んだ成果のひとつなのであろうか、彼は建築的フォルムを成型するのである。アカデミーで同窓生であったアーティストのバーバラ・ク

リスティンは、クレフの作品について「アカデミーに入学する前は器形であったが、(彫刻という)別素材を選んだのち、建築を思わせる形態へと進化した」と述べている(1)。

作品を制作する際、クレフが特に意識しているのは、頭の中のアイデアを現実にとどのように取り込むか、つまり表現するか、ということであり、それは彼にとって、美、フォルムの確定及び表出した世界の新たな様相であり、自身の冒険及び挑戦なのだ。一方で、彼は、自分の制作意図を伝えること以上に、受容者がそれぞれの解釈で作品に接することを望んでいる。

ここに、志野釉の陶枕を思わせるオブジェが現前する。ファエンツァ国際陶芸コンクール大賞受賞と同年に制作された本作品は、受賞作品と同様に、手びねりで成形された四本足の付いた直方体である。上面にあしらわれた 8 個の穴は、呼吸をし、内なる声を外部に伝えるかのごとく、天を見つめる。天を見つめていたそれらの穴は、酸化コバルトの直線で結ばれて二つの正方形を作り出している。1300℃のガス窯で還元焼成されたこの作品は、ストーンウェアの質感により軽やかな量感を感じさせ、彫刻的でありながら、土の特性を充分にいかし、大きな存在を見せるのである。

(註釈 1)Christin Barbara, "Micheal Cleff In a Vibrant Order",
Ceramics: Art and Perception, no.34, Australia, 1998, p.11.

【学芸員 岩井美恵子】

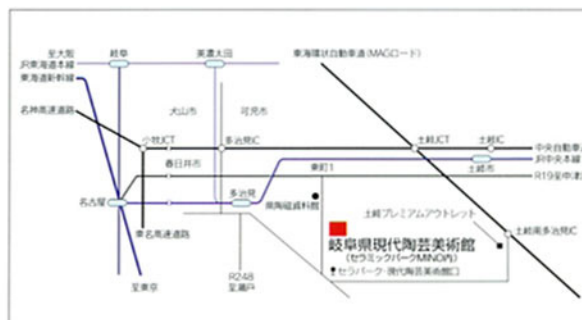


岐阜県現代陶芸美術館
Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

〒507-0801 岐阜県多治見市東町4-2-5
tel.0572-28-3100 fax.0572-28-3101
http://www.cpm-gifu.jp/museum

開館時間

午前10:00～午後6:00(入館は午後5:30まで)



電車でのアクセス

- 東京・大阪方面→名古屋駅でJR中央線に乗り換え
- JR中央線多治見駅からは
 - ・タクシー 所要時間約10分
 - ・セラパークバス 所要時間約15分
 - ・セラミックパークMINO]下車(夜道を歩く火～全曜日)
 - ・多治見市コミュニティバス オリベールト
 - ・所要時間約25分[セラミックパークMINO]下車(土・日・祝)
 - ・東鉄バス[瑞浪駅前]行き、[妻木]行き
 - ・[セラパーク・現代陶芸美術館]下車徒歩約10分

お車でのアクセス

- (駐車場無料 一般車312台収容)
- 東名高速道路・名神高速道路
- 小牧JCT経由で中央自動車道へ
- 中央自動車道多治見ICから国道19号を土岐・中津川方面に約5km、東町1の交差点を右折
- 東海環状自動車道土岐南多治見ICから約5分